

## Cécile Massart展-COVER- 鑑賞の手引き

吉田映子（よしだ・えいこ | 名古屋大学大学院 文学研究科 博士前期課程）

遺物層が高さ8メートルに達して古い城壁の石の基礎工事がその中に埋没したときに、はじめて調度類が変化した。この層の家々の廃墟のあいだからひき出された陶器は、多くはいつそう美しい外観をしめしていた。(中略)われわれ近代人は技術上のあらゆる手段を完成しているけれども、これらの品にたいしてなおしばしば最高の敬意を払わねばならないものがある。

(シュリーマン『古代への情熱』岩波文庫 原著初版1891年 「第7章 晩年」より)

現代の考古学者がギリシャの壺の中にオリーブ油や穀物を見つけ、当時の生活に思いを馳せるように、未来の考古学者もまた、私たちの世代が残す遺産から生活や技術の復元を試みるでしょう。そのとき、未来人たちの目に現代の生活様式はどのように映るのでしょうか。

現在日本では、放射性廃棄物処理の基本方針として地層処分という方法が選択されています。放射レベルの高い廃液はガラス原料と溶かし合わされ、ステンレス容器の中で固められます。更に鉄製の円筒型容器と、緩衝材と呼ばれる粘土で覆われ、地中深くの坑道へと埋められます。青森県六ヶ所村には、この地層処分を待つ廃棄物が現在も保管されています。一方で、埋められた廃棄物の放射性は徐々に弱まりながらも、何百年、もしかしたら何千年と続きます。

セシル・マサールは、この半永久的に存在する廃棄物の保存サイトの危険性と、さらには、潜在的な秘匿性に危機感を持っています。廃棄物の保存サイトは、ある年代までは、人工的な監視の下に置かれますが、何百年後、地中に埋蔵されたまま忘れ去られないとも限りません。これまで廃棄物処理事業に関する記録は、文書、図式、写真、映像などで残されてきました。しかし、言葉の意味や視覚システム、情報の保存媒体が時代によって変化することは、20世紀の記憶も新しい私たちには容易に想像できることです。マサールは、現代から途切れることなく続く時間のずっと先の人類までもが、その存在と危険性を視覚的に読みとることが出来るような普遍的なマークを作り出します。

見慣れたギャラリーの壁や床に張り巡らされた謎めいたマーク。そこに足を踏み入ると、まるで魔法陣の中に立っているような不穏な空気を感じます。マークのもつ暗示的な意味が身体に作用していくような不思議な心持ちです。作家が積み上げてきた造形的なそして表現上の様々な工夫が、人類の(願わくば)果てしのない歴史と結びつくことで、何か異次元のサイトが生まれたのでしょうか。

参考：NUMO(原子力発電環境整備機構)ウェブサイト  
<http://www.numo.or.jp/index.html>

